

一塊のででむし動くああさうか

藤田湘子

鷹入会前の私が初めて藤田湘子に会った時、かけられた第一声は「高野素十はどうだ？」だった。私に俳句を指導してくれた揚田蒼生さんから聞いていたのかも知れないが、私は短歌では表せない素十の俳句の世界を求めている。そして、その夜約束した一物俳句の例句を十句書きぬいた紙を、後日蒼生さんづてに頂戴した。

その中の一句に「かたつむりつるめば肉の食い入るや 永田耕衣」があった。ででむし、蝸牛は、私にとつては忘れがたい季語であり、俳句である。

湘子先生のこの句は一物俳句とは言えないが、一匹のかたつむりを見つめ続け、ふつと気を抜いた瞬間「ああさうか」と感得した、自祝の一句でもあろう。

2002年（H14）第十一句集『てんてん』 鑑賞・轍郁摩